

信 毎 歌 壇

小島 なお選

放流の虹鱒子らに捕獲され生存時間一分五秒

(木曾町) 新村 亮三

動かないゼンマイみたいな太蚯蚓掃かれてわっと
蟻を走らす

(小布施町) 市村志津枝

「三才」といふ名の駅に写真撮る親子に白きコス
モスの揺れ

(長野市) 水上 義昭

仕舞ったはずの羽がはみ出す骨が鳴る夏休み明け
は皆ぎこちない

(松本市) 美甘 歆

むかへたる外科医の義父のわづかなる荷に御巢鷹
の感謝状あり

(長野市) 原田 浩生

屋根の上ソーラーパネルを敷き詰めて自分の電気
は自分でつくる

(中野市) 増田きみ江

看護師の名札のミッフィーと目を合わせ年に一度
の採血耐える

(小諸市) 池田 真弓

熱中症予防対策もうひとつ椅子が欲しいと山田の
案山子

(小川村) 久田 肇

滑りゆく「キャッチ、ロウ」にそっと混ぜ夏の想
い出湖面に仕舞う

(千葉県成田市) 清水 洋子

迎へ火の煙けむいと姪は言ひにこやかに座し皆を
待ちあらし

(佐久市) 大場 和晴

用水の清掃作業に拘る泥蠢く泥鱈を元に戻しぬ

(長野市) 山岸しげお

葱刻み鯉にかけて感謝する種取りし日の元気な父
に

(飯島町) 酒井千代美

第一首、地域の催しだろう。あつという間の命を泳いだ虹鱒。わずか「一分五秒」のきらめきを切なく、まぶしく思う。第二首、乾いて地面にへばりついた太蚯蚓。ゼンマイを巻くと、刻々と夏の命

の生と死が分かたれる。第三首、しなの鉄道北しなの線の駅。旅の時間を過ごす親子にやさしい初秋の気配が寄り添う。第四首、伸ばした羽をまだみなしまいきていない。比喩をはみ出しそうな実感。

選評

米川 千嘉子 選

盂蘭盆会この一年に世を去りし人らのカルテ外し
香焚く

(千曲市) 上原 博司

この花はヒメオドリコソウこころ踊る君とかうし
て話してゐたい

(塩尻市) 藤森 円

砂混じる記憶の分だけ甘くしたバナナケーキの黄
金色の照り

(松本市) 堀内 悠子

歌いたい希望があれば何処までもギター抱えて仮
設住宅

(小諸市) 星野 直人

逝きし娘の普段着悲し残り香のありとて纏う八十
路の母は

(飯田市) 春日 みか

全身を振りしぼり鳴く蝉の声亡き娘の誕生の日ぞ
思ひ出づ

(小諸市) 塩川 篤子

亡き人は生きいる人の心にしか生きられぬゆえ生
きて忘れず

(佐久市) 佐藤千栄子

改築の生家の座敷に蹴鞠絵の襖はのこる往時のま
まに

(御代田町) 土屋 春雄

共白髪互いの命ぎゅっと握り横断歩道そろそろ渡
る

(小諸市) 池田 真弓

古箏断捨離すれば恥ずかしい妻に宛てたる恋文
の束

(伊那市) 赤羽 正彦

わが部屋を狭く行き来す首ひとつ高くなりたる男
孫の五人

(長野市) 近藤 光子

戦場で病に倒れし父を知らず敗戦日来て胸が騒立
つ

(千曲市) 飛田 一子

第一首、鍼灸指圧師として関わった人々の体や心に触れた記憶もよみがえるだろう。第二首、ヒメオドリコソウが第三句を序詞のように導いて楽しい。第

三首、嫌なことがあった時は砂糖を多めに。おいしく食べて記憶を過去に。第四首、「南相馬市の集会場」と添え書きが。ボランティアで行かれたか。

選評

小池 光選

夏風邪よ今日でおさらば投げ放つ沢田研二の帽子のやうに (中野市) 大坂くみ子
 ランドセル開けては閉めて何度でも確かめている入学の子は (長和町) 羽毛田 栄
 もくもくと入道雲が湧いてきて急ぎ取り込む客用布団 (長野市) 小林 操
 面倒と思わずすぐに辞書をひく癖のつきしは短歌のおかけ (佐久市) 臼田宇多子
 修学旅行のふとんにもぐりて飲みたりしウイスキーただ辛かりしのみ (長野市) 原田 浩生
 「そのポロシャツ十歳若く見えますね」旨しいのわれに嬉しい言葉 (千曲市) 上原 博司
 あの時もミンミン鳴いてた「へいたいにいかずにするぞ」聞いた気がする (長野市) せきたつお
 雨樋で遊ぶ雀の五羽をりぬ部屋で見てる我に気付かず (飯綱町) 坂井 寿男
 一匹しか捕れなかったと泣きじゃくる女童はじめの金魚掬いに (長野市) 近藤 光子
 夫逝くも山椒の木にぶら下げしころがね風鈴涼しき音色 (千曲市) 倉石みつる

佳作

朝顔の浴衣似合ひて孫ながら乙女となりし姿がまぶし (伊那市) 小坂 明子
 今年から地区役ならば汐々も皆の苦情を聞かねばならぬ (伊那市) 赤羽 正彦

選評

第一首、大胆でシンプルな比喩が力強くておもしろい。本当に沢田研二はカッコよかった。最近テレビでみかけないがどうしているのだろう。第二首、ランドセル買ってもらった子供。うれしくてた

まらない。金具をいじって開け閉めして確かめている。楽しい学校生活が待っていますように。第三首、ただの布団でなく客用布団なのがユニーク。降ってくるかもしれないので急ぎ取り込む。

信 毎 俳 壇

神野 紗希 選

枇杷老樹秋のみづ得てさやぎたる (長野市) 水木 朱実
 草市の裏を千曲の瀬音かな (小海町) 依田 久代
 農業を撒かぬ捨田に虫すたく (長野市) 青木 武明
 児等の手に川原撫子終戦日 (中野市) 横田 仙壽
 秋近し籬垣抜ける草の蔓 (上田市) 竹内 重美
 夏帽をとれとサーマルカメラいふ (佐久市) 西田 和彦
 朝顔と小鳥の好きな父なりき (飯綱町) 坂井 寿男
 山を見て日傘ひとつのベンチかな (岡谷市) 吉池富貴勇
 蜩の早や鳴き初むやおらが里 (佐久市) 木内利一郎
 金色の蜥蜴一匹枯草野 (高山市) 五味 力

佳作

並び立つ出征馬の碑夕立去る (青木村) 佐藤 哲夫
 雑木蔭銀竜草に出合いし日 (麻績村) 塚原ふじ子

選評

一句目、風を受けた葉のさやぎ、樹のぼる水のさやぎ。実をつけ終わった老樹になお心を寄せる定点観測が、世界をくきやかに澄ませる。二句目、千曲川の瀬音が、草市という人間の営みの素朴さ

を引き出した。三句目、人間が手放した土地は自然へ返る。捨田を生む社会構造に思いを寄せつつ。四句目、子どもたちには未来永劫、銃や血ではなく、川原撫子を、平和の光を握っていてほしい。

坊城 俊樹 選

祈ることばかり八月過ぎてゆく

(富士見町) 鬼束 淳子

滑り込む砂塵まみれの日焼指

(佐久市) 神津 武士

ラッパ飲みベンチの中は暑かるう

(中野市) 増田きみ江

ぞくぞくと入道雲が立ち上がる

(飯島町) 小林 天龍

シート干す真上に夏の雲真白

(佐久市) 佐藤 勝子

迎火や父母に伝えること尽きず

(長野市) 井出 節子

初めての両家の集ふ夏座敷

(千曲市) 中村 美樹

裏返し表に返し天瓜粉

(長野市) 山岸富士子

秋桜を揺らして曲がる配達人

(松川村) 岡 豊村

ブロンズのおかつば少女秋高し

(中野市) 横田 徳子

佳作

野良帰り千種の中に吾亦紅

(飯島町) 横山羽阿那

鶏頭の殴り合ふこと揺れてをり

(立科町) 村田 実

子園の句ではないか。本塁へ生還したヘッドスライディングの指。果たしてセーフかアウトか。三句目、これまた甲子園のベンチの風景。選手はもとよりコーチも監督も灼熱のベンチで大汗。

一句目、確かに8月というものは鎮魂の月である。お盆はもとより、ヒロシマ・ナガサキへの原爆の投下。そして終戦の日。記憶にはその頃大きな航空機事故もあった。二句目、これは高校野球の甲

選評

今井 聖 選

門火焚く焚かるる時を思いつつ

(長野市) 松本 宏要

空蟬とはただ生きている吾のこと

(松川村) 岡 豊村

宇宙しみ流る流るや天の川

(長野市) 武田 芳子

八月の空の青さに汚点あり

(松川村) 中野 重行

新涼やみやげの簪に名を刻む

(佐久市) 町田ゆかり

ボルシチを煮込む厨に大西口

(長野市) 宮沢 朝子

ラグーシャツ竿にはためく敗戦忌

(松本市) 伊藤 和夫

神木の幹の剝落秋暑し

(松本市) 小林 幸平

田に水のやつと入り来て畦に座す

(佐久市) 依田 俊

夏休み今日は床屋に子を預け

(佐久市) 西田 和彦

佳作

蓮池の遺伝子繫ぐ波紋かな

(坂城町) 柄沢 満則

やんまの眼くもりと天地覆す

(箕輪町) 向山 政俊

なり変わる。三句目、天の川はほんとうに美しいか。宇宙を流れていくゴミの集積に見えないか。その張本人はどこかの星だ。四句目、八月の青空の一点に汚点を見いだす。何の比喩か、みな分かっている。

一句目、門火を焚いて御盥を迎える。そのうち俺が迎えられる側になるんだなど。暗い印象だが風習の中で生まれ死んでゆく安らぎも見える。二句目、凝視の果てに、脱皮して殻になった空蟬が自分に

選評